

# キャンパスを歩き、街を訪ねる。

硬式野球部長、丹下健教授と人工芝張り替えを待つ東大球場を訪ね、日高准教授と農学部御用達の欧風洋菓子店「翠の窓」を覗く。

## モダンアーチと悲願の一筆

東京大学野球場

**初** 雪の東大球場を丹下健教授（造林学研究室）と歩いた。教授は学生時代ここで白球を追ったひとりで、いまは東大野球部の部長を務める。

往年の活躍を訊くと「1年のとき新人戦に代打で出て三振、それで野球人生が終わりました」と笑った。しかし、2年からマネージャーとなり、選手寮の管理をはじめ野球部の運営に奔走、4年時には六大学野球連盟の当番校として大学野球の振興に尽力した。

東大球場ができたのは昭和12年（1937）。現在、内外野スタンドからの観戦はできないが、竣工時は観覧席600人、スタンド7,500人、合計約8,000人収容の堂々たる球場だった。当時の雑誌（「野球界」10月号）には「野球を観なくとも（球場に）来るがいい」と紹介されている。

とくに目を惹くのはモダンなアーチを描く鉄筋コンクリート造りの観覧席だ。「内田ゴシック」で知られ、のちに東京帝国大学総長も務めた建築家内田祥三よしかずの手によるものとされており、平成22年（2010）、文化庁有形文化財（建造物）に指定された。磨耗して艶光りする木の

手すりに歴史がにじむ。

グラウンドの方はいま化粧直しの真っ最中。神宮球場等から譲り受けて凌いできた人工芝がボロボロになったため張り替えるそうだ。昨年、芝張り替えの基金を創設し寄付を募ったところ、数ヶ月で資金が集まった。なんとその4割は野球部OBからだったという。

「年配のOBにはいつでも、現役になにかしてやりたいという気持ちがあります」と丹下教授は話す。「自分たちが好きなように野球ができたのも、昔の先輩たちのおかげ。だから今度は自分たちが、と思うのでしょうか」



東大野球部部長 丹下健教授

さらに教授はこんなことを教えてくれた。

球場近くには選手のための「一誠寮」がある。寮には、元野球部部長で癌研究の世界的権威長與又郎の揮毫による額がある。この額、よく見ると「誠」の最後の一画が欠けている。「野球部が六大学リーグ戦で優勝したら入れよう」ということになっているが、野球部創設以来90余年、悲願の一筆は白いまだ。

今年の健闘を祈ろう。



野球部OBをはじめ多方面からの寄付で人工芝の張り替えが始まったグラウンド

